

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成27年3月20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻井 昭雄 様

所属部局 地域研究統合情報センター

職名 准教授

氏名 帯谷 知可

助成の種類	平成26年度・研究成果公開支援・国際会議開催助成		
事業内容	アジア中東学会連盟第10回大会「アジアの視点から中東研究を脱・再構築する:アジア中東学会連盟創立20周年」の開催		
開催期間	平成26年12月13日 ~ 平成26年12月14日		
開催場所	京都大学百周年時計台記念館		
参加者	総数 82名	内訳 国内 43名 国外 39名	
成果の概要	別添の通り。 「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(報告要旨集、プログラム、チラシ)		
会計報告	事業に要した経費総額	4,126,455 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	・(機関や資金の名称) 平成26年度科研費・研究成果公开发表(C)「アジアの視点から中東研究を脱・再構築する:アジア中東学会連盟創立20周年」(日本中東学会、会長栗田禎子、課題番号260301) ・参加者からの会費	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費目	金額(円)	財団助成充当額(円)
	旅費・交通費	2,319,835	0
	会場・会議費	490,838	206,018
	印刷・製本費	208,056	187,056
	通信・運搬費	12,686	5,686
	謝金	340,620	235,620
消耗品費	10,997	10,997	
英文校閲費	354,623	354,623	
レセプション・エクスクーション費	388,800	0	
計	4,126,455	1,000,000	
当財団の助成について	助成をいただき、誠にありがとうございました。おかげさまで京都大学百周年時計台記念館という由緒ある会場で行うにふさわしい会議を組織することができたと考えております。 一点感想を述べさせていただきますと、貴財団の規定ではたいへん使いやすい仕組みが設定されているにもかかわらず、大学のルールとしてはこれを寄附金とする必要があることから、助成金の執行をすべて大学の会計の方式にのっとり行わねばならず、そのため柔軟な執行は事実上不可能でした。(例えば、会議用の紙コップの購入にも検収を求められ、その証拠として紙コップの写真の提出を求められたり、謝金の事前書類提出も雇用予定に支障が出るほど煩雑でした。)ルールはルールなのですが、本来設定されている使いやすさが失われないような方策があるとよいと思いました。		

成果の概要

帯谷 知可

平成26年度京都大学教育研究振興財団国際会議開催助成を受けた、アジア中東学会連盟第10回大会「アジアの視点から中東研究を脱・再構築する：アジア中東学会連盟創立20周年」開催の成果について、以下に概要を報告する。

アジア中東学会連盟 Asian Federation of Middle East Studies Association (AFMA) は、日本、韓国、中国、モンゴル各国の中東学会による連盟であり、2年に一度各国持ち回りで研究大会を開催している。本年は京都大学においてその第10回大会が行われる運びとなり、平成26年12月13日（土）、14日（日）の両日、百周年時計台記念館において、国内から43名、国外から39名の参加を得て開催された。ネリー・ハンナ教授（カイロ・アメリカ大学、エジプト）、サラ・シャリアティ教授（テヘラン大学、イラン）という中東研究の国際的権威による2つの基調報告に続き、16の分科会において合計43件の学術報告が行われ、非常に盛会であった（プログラムの詳細については別添資料の通りである）。報告者のうち30人以上が外国人であった。

今回の研究大会では、韓国と中国から招待枠を超えた参加希望があり、過去最大規模の参加を得ることができた。昨今の東アジア情勢から、両国からの参加が懸念されていただけに、学術研究交流にそのような障壁が存在していないことが確認される結果となった。また、日・韓・中・モンゴルという加盟学会からだけでなく、中東や欧米からも報告したいとの希望が多数寄せられ、例年にない報告数となった。欧米の中東研究者にもアジア中東学会連盟の存在と活動が確かに認知されてきていることが感じられた。とりわけ、シンガポール国立大学の中東研究所のオブザーバー参加は特筆すべきことであった。同研究所は、欧米をはじめとして世界中から研究者を雇い入れており、同研究所の参加によって本大会は一気にグローバル化した感がある。本大会での一コマを紹介するなら、日本・中国・韓国の新進気鋭の中東研究者が、シンガポールに住む英国の中東研究の重鎮の司会で研究発表を行い、中東の、一世を風靡した思想家の令嬢が議論にコメントをする、というような一幕が見られたのである。

今回の大会では、常連ともいえるべき中堅からシニアの研究者に加え、質の高い学術水準を持つ若手研究者・女性研究者の参加がたいへん顕著であった。近年、アジア中東学会連盟の大会では若手研究者の自発的参加が目に見えて増加してきていたが、今回は日本・韓国・中国ともに、若手と女性が参加者の大半を占めていたといっても過言ではない。フロアからは次々に、「アジアの若手女性研究者」の手が挙がり、鋭い質問が飛び交い、熱心な議論が行われた。アジア発の初めての試みであった中東研究の学会連合は、創設から20年、善隣外交や社交の域を超え、同じ中東研究を目指すもの同士という自覚のもとに、真摯に切磋琢磨する段階に入ったこと、そして今後の発展への期待がますます高まりつつあることが実感できた大会であった。